アソーレス（アゾレス）諸島の現在

池 俊介

IKE Shunsuke

I 大西洋に浮かぶ島々

ポルトガルのアソーレス諸島は、大西洋に浮かぶ九つの島々から構成される（図1）。総面積は約2,322 km²、人口は約24.3万に及ぶ。最大の島であるサン・ミゲル島（約745 km²）でも奄美大島より少し大きい程度で、最も小さなコルボ島に至っては約17 km²にすぎない。日本では、英語名であるアゾレス諸島という名称のほうが一般的であるが、「アゾレス高気圧」等を通じて地名は知っていても、具体的な地域イメージを描ける人は、地理学関係者でもそれほど多くはないだろう。

アソーレス諸島は、大航海時代の初期にポルトガル人によって発見されて以来、大西洋を航行する船舶の中継地・補給基地として利用されてきた。また、アメリカ合衆国の捕鯨船が大西洋で盛んに操業していた18～19世紀には、乗組員として住民が雇用され、そ

れを契機にアメリカ合衆国への移民が増加した。このように、世界経済の中心地であるヨーロッパと北米の中間に位置するアソーレス諸島は、離島でありながら「ヨーロッパとアメリカの結節点」として特異な歩みを続けてきた地域である（池2000）。

筆者は、長期研修でリスボンに滞在していた1998年の夏にアソーレス諸島の島々を初めて訪れた。しかし、その折にはサンタ・マリア島、グラシオーザ島、フローレス島を訪れる時間がなく、それが長く心残りであった。その後、2019年の夏にアソーレス諸島を再訪する機会を得て、ようやく全ての島々を訪れるという念願がかなった。そこで、筆者が撮影してきたアソーレス諸島のさまざまな「景観」に着目しながら、それらの景観を糸口にして地域の特徴や歴史を読みとっていきたいと思う。

図1 アソーレス諸島の島々の位置

図2 コルボ島の「大カルデラ」
内側斜面も石垣や生垣で仕切られている。
(1998年8月筆者撮影)

図3 火口を利用した闘牛場
グラシオーザ島サンタ・クルス集落近く。
(2019年7月筆者撮影)

II 火山活動が生んだ景観

アソーレス諸島は、北米・アフリカ・ユーラシアの三つのプレートの境界近くに位置しており、北米プレートの東端にあたる大西洋中央海嶺をはさんで、その西側にフローレス島・コルボ島が、東側に残る七つの島々が分布する。プレート境界に位置するアソーレス諸島の島々は、火山活動によって3,600万年前から形成されてきた火山島であり、カルデラをはじめとする多様な火山地形が見られる (Nunes et al. 2018)。そのため、世界の火山学者の間では、アソーレス諸島は「火山学の聖地」として知られているようである。

コルボ島には、アソーレス諸島に多数あるカルデラの中でも大規模なものが存在する。その名も「大カルデラ」であり、火口の直径は約2 kmに及ぶ (図2)。コルボ島は周囲を絶壁で囲まれた小さな島で、平坦地に乏しく放牧できる土地も限られているため、頂上カルデラの内側の急斜面までも牛の放牧地として利用されている。カルデラ内には池が見られるが、ここは家畜のための貴重な水飲み場となっている。

こうしたカルデラやマールはアソーレス諸島の各所に見られるが、多くは牧草地や植林地として利用されている。珍しい例としては、グラシオーザ島の中心集落であるサンタ・クルス近くの小山がある。ここでは火口のくぼみの部分をうまく使って円形の闘牛場が作られている (図3)。このように、火山地形が住民の暮らしの中にすっぽり収まっているところがとてもユニークである。

ただ、アソーレス諸島は火山による災害にもしばしば見舞われてきた。近年で最も大きな被害をもたらしたのは1957年～1958年まで1年以上にもわたって活動が続いたカペリーニョス火山 (ファイアール島) の噴火である。海底火山の噴火により島の面積が2.4 km²も増える大規模な噴火であったが、幸い死者は1人も出なかった。しかし、火山噴出物による建物・農地の被害は甚大で、島の住民の2割以上が離島を余儀なくされ、当時は移民制限を行っていたアメリカ合衆国でも特例として移民が許されるほどだった。

また、ポルトガル本土に比べて地震も多く、2010年以降だけでも有感地震が計37回、2018年には震度5の地震 (サン・ミゲル島) を含め、14回も発生している。第二次世界大戦後で最も大きな被害をもたらしたのは、1980年1月1日にテルセイラ島で発生した地震で、4,727戸もの家屋が倒壊した。大航海時代から物資の集散地として繁栄してきたアングラ・ド・エロイズモ (テルセイラ島) も、この地震で甚大な被害を受けたが、街並みは見事に復元され、1983年にはユネスコの世界文化遺産に登録されている。

一方、火山活動は住民に災害をもたらすだけでなく、温泉に代表されるような自然の恵みも与えてきた。たとえば、サン・ミゲル島の東部にあるフルナスの街は、温泉保養地として多くの観光客で賑わっている。街の数カ所で温泉が湧出しているが、それらの温泉で茹でたトウモロコシや、肉・野菜・腸詰を入れた大鍋を土中に埋めて地熱で蒸す郷土料理Cozido das Furnasは、観光客に特に人気である (図4)。

図4 地熱を利用して作る郷土料理
盛土の下に鍋が埋められている。
(2019年7月筆者撮影)

図5 サン・ミゲル島の牧草地
牧草地はアジサイの生垣で仕切られている。
(1998年8月筆者撮影)

III 牧草地が広がる景観の誕生

アソーレス諸島の多くの島々では、起伏に富む地形に延々と牧草地が続く景観が広がっている（図5）。しかし、こうした農業景観が形成されたのは1960年代末以降のことであり、その歴史はそれほど古くはない。

島々への入植は15世紀半ばに始まったが、離島であるアソーレス諸島ではまず食糧の自給を図る必要があった。そのため、入植当初は小麦が主に栽培されたが、17世紀半ばに中南米原産のトウモロコシが導入され、18世紀中頃には島の主要な農作物となっていた。

しかし、1960年代末からアソーレス諸島の農業に大きな転機が訪れることになる。いわゆる「家畜革命」である。家畜革命は、大土地所有者が標高の高い斜面を牧草地として開墾し、機械力を駆使した大規模な酪農経営を目指したもので、1980年代初めまで続くことになった。その結果、トウモロコシ等の自給作物の栽培を中心とした従来の農業経営から酪農へと、アソーレス諸島の農業は大きく転換することになった。つまり、現在見られるような牧草地が広がる景観は、家畜革命の結果として出現したもののなのである。

その後、酪農は順調に発展し、現在ではアソーレス諸島の総面積のうち、約半分が牧草地で占められている。また、耕地でも主に飼料用トウモロコシが栽培されており、いまや酪農がアソーレス農業の中心的な存在となっている。また、家畜革命前はほとんどが零細

経営農家だったが、現在では20 ha以上の経営耕地面積をもつ家が7割近くにまで増加し、1戸当たりの経営規模がかなり拡大した。ただ、こうした大規模な酪農経営が展開してゆく一方で、家畜革命により多くの農業労働者や零細経営農家が離農を余儀なくされた。Daveau（1995）によれば、この家畜革命が1960年代後半から1970年代にアソーレス諸島から大量の移民が流出する原因の一つになった。

酪農の発展にともなって、アソーレス諸島の乳製品の生産量も飛躍的に増加した。たとえば、牛乳の生産量は家畜革命前の1965年に比べると、現在は10倍以上に伸びている。日本では消費期限の短い冷蔵庫で保存する牛乳が一般的だが、アソーレス諸島で生産される牛乳のほとんどは常温で長期間保存できるいわゆるロングライフミルクである。ポルトガルのスーパーでは、1リットルの紙パック入りロングライフミルクが6箱ずつビニールで梱包されて店先に並べられている。こうしたロングライフミルクの普及のおかげで、消費地まで遠いアソーレス諸島のような離島でも牛乳生産が成り立つようになった。ただ、乳製品の生産量では牛乳が約7割を占めるが、生産額ではチーズがその約半分を占めている。輸送費の負担が大きい離島では、より付加価値の高いチーズの生産が有利ということであろう。

ただ、正確に言えば、アソーレス諸島の全ての島で酪農が盛んというわけでもない。酪農の中心はサン・ミゲル島やテルセイラ島のような比較的大きな島であり、サンタ・マリア島やコルボ島のような小さな島で

図6 石垣で仕切られたピコ島のブドウ畑
石垣で約15 m²の小区画に仕切られている。
(1998年8月筆者撮影)

は酪農は行われていない。これらの島では生産者の数も限られ、牛乳の加工施設が存在しないためである。しかし、これら酪農が成立していない島でも、肉牛の飼育が行われているため、やはり酪農地域と同じように牧草地が広がる景観が見られる。たとえば、サンタ・マリア島では1960年代後半から1970年代にかけて働き盛りの人たちがカナダ・アメリカ合衆国に移民として流出し、地元の農業労働力が不足した。そのため、それまでのトウモロコシ・小麦等の穀物の栽培に代わり、残った少数の人たちでも維持できる肉牛の飼育が主流となった。こうした肉牛飼育や酪農が急速に発展する中で、アソーレス諸島全体に牧草地が広がっていった。

アソーレス諸島の牧草地の景観で特徴的なのは、牧草地の仕切りとしてアジサイの生垣が使われていることである。もちろんヨーロッパで一般に見られる石積みの仕切りもあるが、アジサイが使われているケースはポルトガル国内でも珍しい。日本でも2008年に料理の飾りとして添えられていたアジサイの葉を食べた人が中毒症状を起こしたことがあったが、アジサイの葉や茎には有毒な成分が含まれているといわれる。実は、牛もそのことを熟知していて、アジサイには近づかないそうである。こうした特性を活かして、アジサイが牧草地の仕切りとして利用されるようになったわけである。アジサイは日本原産だが、19世紀にアソーレス諸島に持ち込まれて以降、各所に植えられ、今では「アソーレスの花」として知られるようになった。夏の開花シーズンには多くの観光客が訪れ、アソーレス諸島の重要な観光資源の一つとなって

いる。

IV 「石垣ブドウ」の景観

離島であるアソーレス諸島では、なるべく付加価値の高い商品作物を栽培する必要があった。そのため、穀物栽培や酪農のほかにも、これまで多様な作物の栽培が試みられてきた。19世紀にはオレンジの輸出が盛んな時期もあったが、現在でも栽培されているのはワイン用のブドウ、茶、タバコなどである。これらの作物のうち最も栽培面積が広く重要度が高いのがブドウであり、気温が低いフローレス島・コルボ島以外の全ての島で栽培が行われている。

アソーレス諸島におけるブドウ栽培の大きな特徴は、図6のように石垣で小区画に仕切られた畑で栽培されていることである。このようなブドウ畑が最も多く集積しているのがピコ島であり、世界でも珍しいブドウ畑の景観として2004年に世界文化遺産にも登録されている。石垣で囲まれたブドウ畑が1,000 ha近くも広がる景観はほかでは見られないもので、さすがに世界文化遺産に登録されるだけのことはある。ただ、こうした石垣を使ったブドウ栽培自体は、ピコ島以外の島々でも広く行われており、アソーレス諸島全体に共通した特徴となっている。

たとえば、サンタ・マリア島では、海岸沿いの急斜面に石垣で区画された狭いブドウ畑が見られるが、図7は同島の南東端にあるマイアという集落のブドウ畑の景観である。また、図8はテルセイラ島の北岸に位置するビスコイトスの集落で撮影したものである。ビスコイトス Biscoitos とは「ビスケット」という意味で、この集落では溶岩が地表に露出し、まさに砕けたビスケットのような溶岩だらけの土地が広がっている。こうした穀物の栽培に向かない条件の悪い土地でも何とか栽培できる唯一の作物がブドウだった。ブドウは溶岩だらけの土地でもしぶとく根をはり、実を結ぶことができる。テルセイラ島内でブドウ栽培がこの一帯にほぼ限られているのも、土地条件の悪いビスコイトス周辺ではほかの作物の栽培が難しかったからである。

多くのブドウ畑は、高さ約1mの石垣（溶岩を積んだものが一般的）で小区画に仕切られている。たとえば、

図7 サンタ・マリア島のブドウ畑
石垣で仕切られた急斜面のブドウ畑。
(2019年7月筆者撮影)

図8 伝統的なタイプのブドウ畑
テルセイラ島のビスコイトス集落にて。
(2019年7月筆者撮影)

ピコ島の場合は、1区画の大きさが約 15 m^2 ($2.5\text{ m} \times 6\text{ m}$)である。ブドウ畑は、比較的気温が高い沿岸部に分布する場合が多いため、海からの潮風による風害や塩害を避けるために石垣が積まれた、という説明が多くのガイドブックには書かれている。ただ、潮風の被害を防ぐだけならば、これほど細かくブドウ畑を仕切る必要はない。そこで、地元の農家の人たちから話を聞いてみると、実は石垣のもつ蓄熱効果が重要であることが分かってきた。

たとえば、テルセイラ島（アングラ・ド・エロイズモ）では、8月の最高気温は $26 \sim 28^\circ\text{C}$ で、 30°C を超えることはない。そのため、ブドウを栽培するには気温がやや低めである。そこで、夜間の気温の低下を抑えてブドウの生長を促すために、ブドウの木の周りを石で囲う栽培方法が考え出された。石は蓄熱効果が高いため、日中に太陽からの熱を吸収し、石垣で囲まれたブドウの木の周辺では夜になってもそれほど気温が低下しない。おそらくこれが、ブドウ畑が石垣で細かく仕切られ、石に埋められるようにしてブドウが育てられている最大の理由であろう。

この事実を知って、まず筆者が思い浮かべたのは静岡市久能地区の「石垣イチゴ」である。石垣イチゴは、温室のない露地植えの時代に海岸から運んだ玉石を積み、石の間にイチゴを植えたことに始まる。今ではビニールハウスの中で栽培されているが、コンクリート板を積んで蓄熱効果を利用している点は昔と変わらない。この石垣イチゴと同じような理屈で栽培されてきたのがアソーレス諸島のブドウであり、まさに

図9 新しいタイプのブドウ畑
テルセイラ島のビスコイトス集落にて。
(2019年7月筆者撮影)

アソーレス諸島のブドウは「石垣ブドウ」と呼ぶにふさわしい。

ただ、ビスコイトスの集落では、石垣で細かく仕切られた伝統的なタイプのブドウ畑が見られる一方で、広い区画の新しいタイプのブドウ畑も目につく（図9）。農家の人の話では、近年は気温が上昇傾向にあり、土地によっては石垣で細かく仕切ると気温が上がり過ぎるため、こうした広い区画に作り直しているそうである。したがって、将来的には小区画の伝統的なブドウ畑がさらに減少する可能性もある。

また最近では、ヴェルデーリョ等の在来品種に加え、ドイツワインの主要品種であるリースリング等の試作を始める意欲的な生産者が現れる一方、手間がかかるブドウ栽培を忌避する若者も多く、全体として生産者の高齢化が進んでいる。その影響で、栽培面積もこの30年間でかつての6割にまで減少しており、ビスコイ

トスのブドウ栽培は大きな転機を迎えようとしている。

V 捕鯨の名残をとどめる景観

図10は、フローレス島の中心地の一つであるサンタ・クルス集落にあるクジラの加工施設跡で、今は博物館となっている場所である。また、図11は、同じサンタ・クルスにあるクジラの見張り台として利用された丘から眺めた景観、図12はサンタ・マリア島のカステロ岬にあるクジラの見張り台跡の景観である。アソーレス諸島では、こうした捕鯨が盛んであった時代の名残が今でも各所に見られる。

アメリカ合衆国では1712年に大型帆船を母船とするマッコウクジラ漁が開始されたが、1730年頃にはすでにアソーレス諸島近海での操業が始められていた。アメリカ捕鯨船による操業が最盛期を迎えるのは19世紀の中頃で、アソーレス諸島の各港は多数の捕鯨船で賑わったといわれる。

アメリカ合衆国の捕鯨船の多くは東海岸のニューベッドフォード（マサチューセッツ州）等を母港としていたが、乗組員の死亡・脱走等による欠員を補うために、アソーレス諸島の住民も乗組員として採用された。当時から、アソーレス諸島は慢性的な過剰人口を抱えていたため、乗組員として乗船を希望する若者が多く、アメリカ合衆国にそのまま定住する人たちも多かった。それが、アソーレス諸島からアメリカ合衆国・カナダへの移民が増加する契機となった。

特に1960年代後半から1970年代にかけては、年間5,000人以上もの島民がアメリカ合衆国・カナダに移民として流出した。当時、ポルトガル本土では、フランスなど西欧先進国への移民が主流であった。しかし、距離的にアメリカ大陸に近く、捕鯨を通じてアメリカ合衆国との関係が強かったアソーレス諸島では、北米への移民が圧倒的に多く、本土とは移民先が大きく異なっていた。

捕鯨に話を戻すが、当初はアメリカ捕鯨船の乗組員として雇用されていた島民であったが、19世紀後半になると、アメリカ捕鯨船で習得した捕鯨技術を活かし、アソーレス諸島に戻って自ら捕鯨を営む動きが見られるようになる。ただ、もちろん大型母船を中心と

図10 フローレス島のクジラ加工施設跡博物館に改装され内部の施設も保存されている。
(2019年7月筆者撮影)

図11 クジラ見張り台跡からの展望
フローレス島からはコルボ島も遠望できる。
(2019年7月筆者撮影)

図12 サンタ・マリア島のカステロ岬
双眼鏡で海を監視してクジラを発見した。
(2019年7月筆者撮影)

する「アメリカ式捕鯨」ではなく、見張り台でクジラの姿を発見するや、すぐさま小舟で接近し、手で鉗を突く小規模な捕鯨であった。

捕獲されたクジラ（主にマッコウクジラ）は、島の

図13 コルボ島の新しい宿泊施設
この8年間に六つの宿泊施設が開業した。
(2019年7月筆者撮影)

加工施設で解体され、主に鯨油の採取が行われた。当時、鯨油は多様な用途（燃料・化粧品・石鹸など）に利用され、商品価値が非常に高かった。特に、採取量の少ない頭部の油は、良質の油として高値で取引された。このほか、骨や肉は粉碎されて肥料や家畜の飼料として使用されたが、アソーレス諸島では鯨肉を食用にする習慣はなかったようである。

アメリカ合衆国では、石油産業の成長とともに鯨油の価値が低下したため、1921年に捕鯨活動が終焉を迎えた。しかし、産業に乏しいアソーレス諸島では、近海のクジラ資源が減少し始めた1970年代になっても捕鯨が続けられた。長く続いたアソーレス捕鯨がその幕を閉じたのは、1987年のことであった（Gonçalves 1996）。

一方、1993年に初めて観光用のホエールウォッチングの会社がピコ島に設立されたのを契機に、現在はサン・ミゲル島などの島々でもホエールウォッチングのための船が運航され、観光客に人気がある。アソーレス諸島の土産物でも、クジラの形に成型した溶岩（玄武岩）のオブジェなど、クジラをデザインした商品が多く、今でもクジラはアソーレス諸島のシンボルの一つとなっている。

VI 観光地化にともなう地域変化

アソーレス諸島を約20年ぶりに訪れて感じた最も大きな変化は、観光地化の著しい進展である。1998年当時は、アソーレス諸島の年間の宿泊者数はわずか

16万人程度で、外国人観光客の姿も少なかった。しかも観光客が訪れるのはリスボンからの直行便があるサン・ミゲル島などに限られ、そのほかの島々には観光地化の影響はほとんど及んでいない状況であった。

ポルトガルでは、どこの市町村にも観光案内所があり、筆者は事前に宿を予約せず、観光案内所で宿を紹介してもらうのがつねであった。この方法で宿を確保できなかったことは皆無に近いが、唯一の例外がコルボ島であった。セスナ機でコルボ島の飛行場に到着してから、まず観光案内所を探したが、どこにも見当たらない。そこで飛行場にいた若い警官に訊ねたところ、この島に観光案内所はなく、宿泊施設さえ1軒もないという。困っていたところ、この男性が自分の下宿している農家を紹介してくれて何とか宿を確保できたが、筆者にとっては宿探しに苦勞した数少ないケースの一つであった。この話からも、かつてのアソーレス諸島がいかに観光とは無縁の場所であったかが容易に想像できるだろう。

ちなみに、泊めてもらった農家（経済的に余裕があるとは思えない小作農のお宅）を出る際に、お世話になったおばあさんに2泊分の代金として約6,000円を渡した。紹介してくれた男性とのやり取りで最初から約束していた金額だったが、「本当にこんなにいいんですか」と言いながら涙を流して受け取っていた姿が今でも忘れられない。おそらく、部屋を一間貸しただけで、これほどの収入が得られるとは思ってもみなかったのだろう。貧しい農村地域における観光の意義をあらためて痛感させられたものである。

ところが、約20年後のアソーレス諸島は大きく変貌していた。アソーレス諸島は、同じくポルトガル領のマデイラ諸島などに比べて晴天率が低いため、「太陽と砂浜」に大きな価値を置くヨーロッパの人々にとっては必ずしも魅力的な観光地ではなかった。しかし、近年はポルトガル本土を訪れる外国人観光客の増加に比例するかたちで、アソーレス諸島を訪れる観光客も急増している。宿泊者数は年間97万人（20年前の約6倍）に達するほか、宿泊施設数も約2,500軒（20年前の約36倍）にまで増えている。かつては宿泊施設が1軒もなかったコルボ島にも2012年に宿泊施設が開業し、現在は6軒にまで増加している（図13）。

2019年の総宿泊者数のうち、約半数を外国人が占

図14 ポンタ・デルガーダの銀行の建物
黒い玄武岩が建物や石畳に用いられている。
(2019年7月筆者撮影)

めるが、その大部分はヨーロッパ諸国の人々である。最も多いのがドイツ人(18%)で、フランス人(10%)がそれに次ぐ。しかし、アソーレス諸島の場合、ヨーロッパから来訪する宿泊客だけでなく、アメリカ人(17%)も多いことが大きな特徴となっている。テルセイラ島に米軍基地があることも関係しているが、やはりアメリカ合衆国へ多くの移民を送り出してきた歴史をもち、現在もアメリカ合衆国との人的なつながりが深いことが大きな要因と考えられる。

特に観光地化の影響が大きいのは、アソーレス諸島の宿泊者数の6割以上を占めるサン・ミゲル島である。中でも中心都市のポンタ・デルガーダは、黒っぽい玄武岩で造られた建築物・石畳で構成されたシックな街並みで人気があり(図14)、島内の宿泊施設の約6割が集中する。そのため、ポンタ・デルガーダ中心部ではレストラン・カフェが急増しており、特に英語メニューを表に掲げた外国人の集客に熱心な店が目立つようになった。もともと北米への移民が多かったアソーレス諸島では、年配者でも英語を話す人の割合が高い。そのため、外国人客にも難なく対応できるのであろう。地元の住民はこうした外国人向けのレストランの増加を快く思っていないようだが、数的には外国人向けの店が圧倒的に多くなりつつある。

このような観光業の急成長に牽引され、近年のアソーレス経済はきわめて好調であり、域内総生産も2009年～2018年の間に24%も増加した。かつては慢性的な過剰人口を抱えていたアソーレス諸島では、1960年代後半から1970年代にかけて毎年5,000人～13,000人

もの人々がアメリカ合衆国やカナダに移民として流出した。しかし、近年の好景気により雇用機会が増えた結果、2018年の移民数はわずか33名にまで減少している。主要産業に乏しいアソーレス諸島では、長い間にわたり移民の流出が常態化していたが、観光地化の波は住民の生活を大きく変えようとしている。

VII アソーレス諸島への誘い

1970年代に航空機のジェット化が進み、大陸間をノンストップで飛べるようになるまでは、アソーレス諸島は大陸間の航空交通の中継地(燃料補給地)として重要な役割を果たしていた。そのため、早くから空港の整備が進められ、現在でもサン・ミゲル島、テルセイラ島などの主要な島々にはヨーロッパ・北米の主要都市からの直行便も運航されている。大西洋上にあるアソーレス諸島は、とかく交通の不便な離島と思われがちだが、実際には大陸からのアクセスが比較的良好な場所であり、それがヨーロッパやアメリカ合衆国から多くの観光客を集める要因の一つとなっている。

もちろん日本からのアクセスは決して良いとはいえないが、美しい景観、温泉の湧出、世界文化遺産の存在、さらにはホエールウォッチング等の海洋性レクリエーションなど、日本人にとっても魅力的な観光要素が豊富である。また、観光地化の途上にあるため、まだ多くの人たちは「観光客ずれ」しておらず、素朴なホスピタリティに感動させられることも少なくない。リスボンからポンタ・デルガーダまでの所要時間は航空機で2時間ほどであり、ヨーロッパのメジャーな観光地に飽きた人たちにとっては、アソーレス諸島は意外な穴場かもしれない。

文 献

- 池 俊介 2000. ポルトガル・アソーレス(アゾレス)諸島——ヨーロッパとアメリカの結節点. 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇) 50: 95-116.
- Daveau, S. 1995. *Portugal geográfico*. Lisbon: Edições João Sá da Costa.
- Gonçalves, J. 1996. Atualização de conhecimentos sobre a biologia e ecologia do cachalote. In *Introdução ao estudo da indústria baleeira insular*, ed. Museu dos Baleeiros, 229-284, Pico: Museu dos Baleeiros.
- Nunes, J., Costa, M., Lima, E. and Machado, M. 2018.

Arquipélago dos Açores: Ilhas de vulcões e de geodiversidade. In *Seminário Ilha do Pico: Ambiente, património,*

turismo sustentável, eds. P. Perreira and P. Nicolau, 6–19, Lisbon: Universidade Aberta.

<著者略歴>

池 俊介（いけ しゅんすけ）

1959年東京都生まれ。静岡大学教育学部教授を経て、現在早稲田大学教育・総合科学学術院教授。博士（学術）。人文地理学および地理教育論を専門とする。主な著書『村落共有空間の観光的利用』（2006年 風間書房）、『ポルトガルを知るための55章』（共編著2011年 明石書店）。